

[研究ノート]

保育者養成校における音楽指導

－鍵盤ハーモニカ導入の有用性について－

The Study of Music Teaching Method Training School for Child-Care Works
－Educational Utility of Introducing Keyboard Harmonica－

前田 美樹

Miki MAEDA

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 音楽指導、鍵盤ハーモニカ

はじめに

鍵盤ハーモニカは、幼児教育の教育現場はもちろん小学校の教育現場においても、子どもの音楽教育の重要な媒体楽器として広く導入されている。最近では、プロの奏者の活躍も目覚ましい。また、全国規模の大手楽器メーカーの音楽教室において鍵盤ハーモニカの講座は人気を集めている。上級者はもちろん、生涯学習として楽しむ初心者向けの音楽教室も充実している。これらの点から、鍵盤ハーモニカはわたしたちの生活において、「子どもから大人まで」が気軽に手にすることができる楽器としての存在を確立してきている。

鍵盤ハーモニカを保育現場や初等教育での器楽指導における媒体楽器として位置づける先行研究は少なくないが、保育士や幼稚園教諭を目指す学生を対象にした鍵盤ハーモニカの音楽的指導の有用性を主張する先行研究はほぼみられない。

本稿は、鍵盤ハーモニカの基本的な奏法とそこから導き出される音楽性についての考察であり、これらの考察から養成校の音楽指導における鍵盤ハーモニカの有用性について提案するものである。

鍵盤ハーモニカについて

鍵盤ハーモニカは、アコーディオン、バンドネオン、ハーモニカ等と同様に、大きさの違う金属リードに送り込まれた空気によってリードが振動する楽器であるが、鍵盤ハーモニカの最大の特徴は鍵盤楽器でもあり管楽器でもあるという点がある。鍵盤ハーモニカの音が出る構造について簡単に触れてお

く。まず、息を吹き込むことにより楽器内の空気室に空気が送り込まれる。このままでは空気は空気室に留まったままであるが、指で鍵盤を押すことによりバルブが開き、留まっていた空気が流れ出す。これによりリードが振動し、音が出る。つまり、「息」・「指」・「空気の流れ」・「リードの振動」の4つが関連しあって音が生まれるのである。音域は、C（ド）を含む32鍵前後のものが一般的であるが、子ども用には鍵盤数が若干少なめで軽いものから、鍵盤数が多くアンプ等に出力可能なもの、一般の鍵盤ハーモニカよりオクターブ低いF（ファ）の音まで出るバス用の鍵盤ハーモニカ等、様々な種類の楽器が国内外の楽器メーカーから発売されている。楽器の持ち方についても、年齢や場面によって、机や膝において吹く方法の他に、左手で持つ方法もある。ホースを使わずにマウスピースを使って吹くことも可能で、ホースの材質やマウスピースの形も多様である。また、プロの奏者においては、ストラップをつけてサクスのように首から下げて両手を使って吹くという演奏法も存在する。比較的安価で、手軽に持ち運ぶことができ、演奏する人・場所・目的・用途等を選ばない鍵盤ハーモニカは、学校教育現場ではもちろんのこと、生涯学習という学びの場においても多くの有用性をもつ。

1 鍵盤ハーモニカの基本的奏法からみる指導上の有用性

鍵盤ハーモニカの基本的奏法については、日本屈指のピアニスト松田昌（まつだ まさ）によって、著書『絶対！うまくなる 鍵盤ハーモニカ 100のコツ』（ヤマハミュージックメディア 2016年）にまとめられている。松田（2016, p.6）はこの著書の冒頭で「・・・演奏法や練習法のテキストがない鍵盤ハーモニカの世界に教則本を作りたいと願っている筆者にとって、本書は長年の夢が実現した本でもあります」と述べている。35年間鍵盤ハーモニカを吹いてきたことにより得た松田の考え、息の使い方、タンギング、表現方法、両手奏法等、この著書で述べられている重要事項を参考にしながら、鍵盤ハーモニカの基本的奏法から導きだされる音楽指導上のメリットについて考察を進める。

1-1 ピアノと鍵盤ハーモニカ：音感覚の相違点

ピアノは打鍵するとピアノ内部のハンマーが連動し鋼鉄の弦を叩くことにより音が出る楽器であるが、鍵盤ハーモニカは打鍵するとバルブが開くことによって空気が流れ込みリードが振動することにより音が出る楽器である。松田は、ピアノは打鍵し弦が振動したあとに音質や音程を変えることができないが、鍵盤ハーモニカは打鍵したあとでも息の使い方によって強弱や音質・音程等の繊細な表現変化ができるということを強調している。この指摘からも指導上の音楽的メリットを見出すことができる。例えば、ピアノ初心者が、課題であるこどもの歌の右手のメロディの1節を1音1音探り弾きするとしよう。この鍵盤をひとつひとつ叩くという打楽器的な学びの行為には、メロディの流れを忘れた単なる「動き」に陥るといった危険性が隠されている。しかし、鍵盤ハーモニカでメロディを弾く場合は、「息を吹く」という行為と「鍵盤を弾く」という行為が連動して行われるため、初心者の練習においても、より「歌う」行為に近づくことになる。息が途切れれば音も途切れる。強弱をつけたいときには、鍵盤に触れている指先だけではなく、身体を使って息で強弱をつけていく。ひと息に吹いたところが音楽的なまとまりとなり、指で「弾く」とこと口で「吹く」という2つの行為でメロディを体感することになるのだ。また、鍵盤ハーモニカでは、鍵盤を押し、息を吹いて音を出した状態からゆっくりと離鍵していくと音程が大きく下がる（＝ピッチベント奏法）。息や指の調整によって音

程や音質が顕著に変化するため、初心者のピアノ奏法の学習では意識することの難しい音質や音色の変化や調整が、鍵盤ハーモニカでは比較的容易に、基本的な奏法のひとつとして体感可能であるとも言えるのではないか。

1-2 基礎練習「弱音ロングトーン」

鍵盤ハーモニカは小さい音こそが美しい楽器であると松田は述べている。鍵盤ハーモニカを吹き始めたばかりの子どもが、何のイメージも持たずに、力任せにブーブと吹いた場合、うるさい音しか出せないというのはある意味当然のことかもしれない。しかし、指や腹や口を意識して小さな音を自然に出せるようになったときに、その音の美しさに驚くはずであるということも述べられている。松田は、そのための最も重要なトレーニングとして、弱音ロングトーンの基礎練習の重要性を指摘している。耳でよく聴き、腹筋の動きをイメージして一定の音量をつくるという弱音ロングトーン・トレーニングを行うことは、繊細な音の変化を聴き分け、音に連動する自分の息や指先、身体を意識する感覚を育成することにもつながる。一定の弱音が出せるようになった次の段階としては、より明確に腹筋を意識した「急激なフォルテとピアノの弾き分け」の練習が推奨されている。ピアノでは弱音は短時間で減衰してしまう。ピアノの場合は、重い鍵盤を身体に慣らした後に、スタッカート、レガート、フォルテ、ピアノ等、一般的な奏法として強弱の弾き分けや音色等を弾き分けるように練習をすすめていくので、初心者がその段階に到達するまでにはある程度の期間を要してしまう。しかし、鍵盤ハーモニカでは、鍵盤に触れる指だけではなく、息を吹き込み、口や舌など様々な身体の部分を意識して音を創っていくので、初心者であってもメロディに表情を加えることができる。そのため短期間で様々な音楽的要素を体感することが可能となる。

1-3 基礎練習「クレッシェンドとデクレッシェンド」

1-1で前述したように、打楽器の性質をもつピアノでメロディにクレッシェンドやデクレッシェンド等の基本的な強弱の表情をつける場合、前後に並んだ音との関連性をもって相対的にコントロールして強弱をつけていくことになる。例えば「ドレミファソラシド」の音階で下のドから上のドまで上がっていくときにクレッシェンドをつける場合は、最初のドより次のレを強く、次のミは前のレより強く、といった一音ずつ打鍵する音の強弱の相対的な関連性をもって「だんだん強く」という表情がつけられることになる。そのためには、打鍵のコントロール習得が不可欠となり、その技術が身に付くまでには、ある程度の期間を要することとなる。それに対して鍵盤ハーモニカでは、基本的な強弱の表情は息の吹き方でつけることができる。松田は、「弱音ロングトーン」と「急激なフォルテとピアノの弾き分け」の効果的なトレーニングとして、「リードが振動する前の音を聴く」という練習方法を提案している。このトレーニングは、単音に指をおき、少しずつ息を送り込んだときに「ピアノシモ」の音が鳴り始める前のほんのかすかな音のするポイント、リードが振動する前の音を聴き分けてそのまま保持するという練習である。松田はこの練習方法を友人の尺八奏者から学んだと言っている。「竹やぶの中を吹きすさぶ風の音」を目指す尺八の世界観、自然界の模倣という意識からは、第一に音を深く体感するという、音を創るための根源的かつ奥深い価値を見出すことができる。音が出しやすいといわれている鍵盤ハーモニカにおいて、あえて出しにくい「究極のピアノシモ」を意識さ

せるというその行為の中には、①自分の「呼吸」に耳を傾ける②息が音になる瞬間を捉える③イメージと体感の擦り合わせという要素が含まれている。ダイナミクス感覚の原点となるのは、「究極のフォルテ」ではなく「究極のピアノシモ」である。鍵盤ハーモニカを用いて得た「究極のピアノシモ」からの音のイメージ感覚は、後にピアノのタッチ感覚に関連させて指導展開が可能となる。「音を聴く」という行為が美しい音に対する気づきを生み、それが、美しい音を創る・奏でるということの原点である。ピアノ初心者、小さい音が美しいという感覚を見過ごしがちであるが、鍵盤ハーモニカにおいてはこの感覚の獲得が可能となる。

1-4 口を使った音づくり

鍵盤ハーモニカは、歌う時と同じように喉や舌、口の形で空気の量を変化させることでさまざまな抑揚をつけることができる。表現力を大幅に向上させるための口の動きと音の変化について松田(2016)は、①タンギング(子音を作るときに使う舌の動き)②母音を作るときに使う下あごの動きの2つの種類を提示している。また、松田(2016,p.40)は母音と子音と声量の関係について具体的な言葉をあてはめて明示している。

- ト (To) 「T」(子音)のタンギング+「O」の母音。大きな音(フォルテ)が出せる
- ン (N) 「N」(鼻音)は、空気がほほすべて鼻から抜け小さな音(ピアノ)になる
- ワ (Wa) 母音の「U」(空気の通過量が少ない)から「A」(通過量が多い)に急激に変化させる(ピアノからフォルテに素早いクレッシェンド)
- カ (Ka) 「K」のタンギング+「A」の母音。とても大きな音(フォルテ)が出せる。

鍵盤を1本の指で押さえ、口の形を変化させる「トンワカ」という言葉を単純な4つの音にあてはめるだけで、基本的なタンギングの他に、アクセントにニュアンスをつける、音色を変化させる等の効果も生まれる。息を吹き込むところから離れた位置に鍵盤があるという特徴が活かされた練習方法の一例である。

また、ここから新たな音楽指導上の可能性を見出すことができる。初心者の場合、音符の長さを相対的に理解したつもりでも、リズムトレーニングや譜読み練習の段階でテンポに変化をつけると、ビート、テンポ感覚、メロディのリズム、音価が曖昧になってしまうことが生じてしまう。先ほど紹介した口を使ったトレーニングでは、全音符を意識してタンギングを行うので、指で4拍分押さえたまま、口では「トンワカトンワカ」と8分音符の音価でリズムを体感することとなる。指でキープしている全音符1つ分の音価と、口で刻む8分音符8つの音価という2つの音価を同時に身体で覚えていくので、計らずとも音価を相対的に体得するためのトレーニングを兼ねることになる。

例として「チューリップ(文部省唱歌)」のメロディを用いた練習を挙げる。

「さいた さいた チューリップの はなが」のメロディを、ハ長調「ドレミー ドレミー ソミレド レミレー」で練習するとする。この場合、最初に繰り返される「ドレミー」のリズムを、「ドレ」各4分音符2つ、「ミー」2分音符1つとして、先ほどの「トンワカ」の練習にあてはめる。最初の「ド」を指で伸ばしている時に、口で「トン」と発音して、8分音符の音価と4分音符の音価を相対的に感

じ取ることになる。同じように、2つ目の「レ」の時には「ワカ」と口で発音していく。「ミー」の2分音符の長さを指で保持している時には8分音符4つ分の「トンワカ」をあてはめる。このように8分音符、4分音符、2分音符という基本のリズム感覚を、複合的なリズムとして意識し体得するための練習が成立する。一般的なソルフェージュトレーニングにおいてもリズム練習は必須ではあるが、鍵盤ハーモニカの基本的な指と口のトレーニングが、初心者のリズムトレーニングや読譜トレーニングとしても成り立つということは、鍵盤ハーモニカがその名の通り鍵盤楽器でもあり管楽器でもある所以である。

1-5 基本ポジションとポジション移動

鍵盤楽器初心者は、「ドレミファソ」の鍵盤に、右手の親指を「1」の指番号として、小指の「5」の指までを配置する「1 2 3 4 5」の基本ポジションから練習していくことが一般的である。典型的なピアノの初心者向けの教則本「メトードローズ」でも、この基本の「ドのポジション」の練習の後に、「ソ」に親指を配置する「ソのポジション」や「レのポジション」へと進む構成になっている。「ドのポジション」と「ソのポジション」等に慣れた次の段階として、1指が3指や4指の下をくぐって打鍵する「指くぐり」の練習や、3指や4指が1指の上をまたいで打鍵する「指またぎ」の練習が紹介され、より多くの鍵盤を弾くために必要なスケール練習に進んでいくことになる。ポジショントレーニングに関しては、さらに楽器に慣れ、演奏音域を広げていくという点においても、5本の指で鍵盤を弾くという鍵盤楽器としての特性上、ピアノと鍵盤ハーモニカにさほど大きな指導上の相違点はないと言えるだろう。

ポジションに関する基本的かつ重要な身体感覚は、正しい手のフォームを意識することである。この点からも鍵盤ハーモニカの有用性を見出すことができる。ピアノは鍵盤のひとつひとつが重いため、手のフォームをキープすることが難しい。また、ピアノは打楽器であるため、打鍵のスピードやタイミングを合わせるのが難しい。これらのことから、ピアノは音が抜けやすく、不揃いな発音になりやすいと言える。そのため、初心者にとってはドからソの5つの鍵盤の音を同時に打鍵するという基本ポジションの練習は難しい。これに対して鍵盤ハーモニカは同時に1つ以上の鍵盤を押さえることが容易な楽器である。鍵盤ハーモニカの場合は、軽い鍵盤をじっくりと捉えてから息を吹くことで、手のフォームをキープしながら揃った音を出すことが出来る。さらに、数種類のポジションやポジション移動、スケール練習における指遣いの定着等を目的とした場合にも適した楽器であるといえる。また、ポジション移動の練習を徹底することは、初心者に起こりがちな「指番号と音名の混同」の回避、さらには「ト音記号とヘ音記号の音域の混同」の回避にも繋がると考えられる。

1-6 タンギングについて

松田は、鍵盤ハーモニカのタンギングについて5種類のタンギングを提唱している。松田(2016, p.41)の提唱するタンギングの種類と吹き方は以下のようにまとめられる。

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| ①子音の T にあたるタンギング | 舌尖をマウスピースの穴にしっかり当てて「トットットト」 |
| ②子音の R にあたるタンギング | 舌尖をマウスピースのそっと当てて「ローローローロー」 |

- ③子音のKにあたるタンギング 喉を締めて「コッコッコッコ」
- ④子音のHにあたるタンギング 喉を軽く締めて「ホッホッホッホッ」
- ⑤子音のDにあたるタンギング 舌先をマウスピースに強く当てて「ダッダッダッダ」

鍵盤ハーモニカのタンギングというと一般的に「T」のタンギングが多く挙げられるが、より柔らかい「R」のタンギングを身につけることによって音楽表現の幅が広がるということが述べられている。また、「T」のタンギングと「K」のタンギングを組み合わせたダブルタンギング、ジャズ・タンギングとして「D」のタンギング、強弱の波をつくり出しビブラート練習につなげるものとしては、5つのタンギングの中で最も柔らかい「H」のタンギングを紹介している。これらのタンギングをマスターすることで、楽曲に適した豊かな音楽表現の実現がより可能となり、演奏する楽しさも広がっていくと考えられる。

しかし、鍵盤ハーモニカ教育において、「タンギング」は、指導上の注意点として話題に挙げられることが多い。小学校の鍵盤ハーモニカ教育について松田は、小学校低学年の子どもたちに「タンギング」は難しいということを指摘し、この時期の子どもたちには、鍵盤の運指の理解、吹き方（特にお腹を使った強弱のつけかた）の2点の習得に重きをおいた指導を提唱している。さらに指導においては、タンギング以外の音の切り方（指を使う、指と同時にタンギング）についても紹介されており、鍵盤ハーモニカはタンギングを使わないレガート奏法が基本の楽器であるということ、リコーダーへの移行として鍵盤ハーモニカのタンギングを捉えないということ、タンギングは奏法の1つであり、演奏上タンギングが必要な時と必要でないときがあるということなどが指摘されている。鍵盤ハーモニカにおいて「タンギング」は、「ビブラート」や「フラッター」といった奏法と並列のものである。しかしながら、指導においては管楽器でもあり鍵盤楽器でもあるという鍵盤ハーモニカ本来の特徴が忘れられがちであり、教育現場においてさえ「タンギングしながら指で音を出す楽器」という曖昧なイメージから抜けきれていないという現状は否めない。このイメージが鍵盤ハーモニカの可能性を狭めているだけでなく、音をイメージする可能性、音楽を楽しむ可能性をも狭めているのではないか。鍵盤ハーモニカは、指導者が楽器本来の特徴を意識して指導することで、様々な音楽的指導（音色・音質・強弱・長さ等の意識と理解、奏法の多様性、フレーズの捉え方等）に有用性のある楽器として広がりを持つのではないか。

1-7 アンサンブルの学び

アンサンブル経験は音楽教室や部活動に入る場合を除くと、多くの場合、幼児期のお遊戯会での合奏や小学校での鍵盤ハーモニカやリコーダーの合奏等でとまってしまう。保育現場では、「歌う、踊る、遊ぶ」等の音楽活動は不可欠であり、保育者にとっては合奏指導や指揮をする場面も十分に起こりうる。合奏指導を行うためには、保育者自らが楽器を演奏しアンサンブルの経験を積んでいることが重要である。アンサンブルの学習では、ソロ演奏とは異なる音楽体験をすることができる。楽曲のもつ限られた時間の中で、自分以外の相手のテンポの取り方、強弱の捉え方、フレーズの取り方、バランスの取り方を同時に感じ取りながら自分の音楽を融合させていく。このようなアンサンブル経験を積んでいくことで、指導者としての客観的な音楽の捉え方が身に付いていく。しかし、ピアノ初心者が

ピアノ以外の楽器とのアンサンブル経験を積んでいくことは容易ではない。アンサンブルの場合、ピアノは、旋律楽器をサポートするだけでなく、ハーモニーを支える役割、テンポをキープするリズム楽器の役割などを兼ねることが多い。自分の音や相手の音を聴き、調和や対比を意識するというアンサンブルの面白さに到達するには時間と努力が必要になるだろう。これに対して、鍵盤ハーモニカの演奏では、基本的に鍵盤を弾くのは右手のみである。コードや単音を指で抑え、口でリズムを刻むことも容易に出来る楽器である。また、これまで述べてきたように、旋律楽器として、音色やニュアンスの変化等、様々な演奏表現を繰り広げることも出来る。音域の近いリコーダーや合唱の曲を用いてピアノアンサンブルも可能である。バロック時代の曲から、ポップス、ジャズ、わらべうたから現代の子どもの歌まで、様々なジャンルに適した演奏表現も可能である。また、演奏形態の面でも、デュオやトリオはもちろん、大人数のアンサンブルに対応できる柔軟な楽器と言えるのではないか。

アンサンブル体験は音を媒体としたコミュニケーション体験である。目に見えない音を通して、自分以外の誰かとひとつの世界を創りあげていくという行為には、保育者に必要な、相手を思いやり、受け入れ、寄り添う気持ちを育てる学びがある。

おわりに

本稿では、ピアニスト松田昌の鍵盤ハーモニカの指導法を取り上げ、保育者養成校における鍵盤ハーモニカ導入の音楽的有用性についての考察を進めてきた。音楽を通して何が出来るのかということ考えたとき、保育者の育成には多くの課題が含まれている。「音楽をする楽しさ」を子どもたちと共有するためには、学生自身の音楽に対する深い感性や技術が表現の源となって音楽活動に活かされる必要がある。学生自身の身体を媒体とした表現世界を深めていくことが子どもの前に立つ表現者としての在り方なのではないか。

鍵盤ハーモニカは、音楽的な世界を深く学び、感じることの出来る可能性を秘めた楽器である。この楽器の有用性を活かした保育者養成校での効果的教育方法の構築、そして広い意味での生涯学習への展開を今後の研究課題とする。

引用・参考文献

- 井口太編著（2015）『新・幼児の音楽教育』朝日出版 第2刷発行
- 厚生労働省（2008）『保育所保育指針』
- 畠澤郎編著（2015）『新・音楽科教育法』朝日出版
- 松田昌（2016）『絶対！うまくなる 鍵盤ハーモニカ 100のコツ』ヤマハミュージックメディア
- 松田昌（2016）『マサさんのこれぞ！鍵盤ハーモニカ』ヤマハミュージックメディア
- 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』
- 文部科学省（2008）『小学校教育要領』

鍵盤ハーモニカ情報サイト

すばらしき鍵盤ハーモニカの世界 http://skmt.cooktone/text_kenhamo/top.html

図版・カタログ等

ゼンオン楽器総合カタログ 2016

ヤマハ学校用楽器・機器カタログ2016